

# エクスカージョン 「体験型の見学会」 の取り組みについて

国土交通省中部地方整備局企画部企画課

## 1. はじめに

今日までに整備されてきた社会資本の多くは、さまざまな人々の協力と人類の知恵ともいえる土木技術の発展に支えられ、われわれの生活のあらゆる場面において重要な役割を果たしてきている。しかしながら、いったん整備されてしまうと「存在して当たり前のもの」となり、その存在価値が顧みられないことも多い。また一方で、社会資本に対する批判なども多く見られるところであるが、それは社会資本の果たしている役割について、必ずしも十分には理解されていないことも一因ではないかと考えられる。

そのため、中部地方整備局においては、日頃より社会資本の役割や必要性などを広く伝え、社会資本整備への理解を深めるための広報活動を推進しており、その一環として、エクスカージョン「体験型の見学会」を実施するとともに、関係機関と連携し取り組んでいる。

## 2. エクスカージョンとは

エクスカージョンとは、従来型の見学や視察とは異なり、訪れた場所で現地を熟知した案内人

(ガイド人)の解説に耳を傾けるとともに、参加者も含めてお互いに意見を交わすことにより、地域の自然や歴史・文化と同時に社会資本を学び、理解を深める「体験型の見学会」である。単なる見学会と異なり、現地調査や意見交換などによって理解を深めるという特色を強く表現するため、学問としての巡検=エクスカージョン(excursion)という言葉を用いている。

エクスカージョンには、パンフレットやインターネットだけでは得られない「ライブ感」「参加・体験」といった大きな特徴がある。同じコースでも訪れる季節や天候によって印象が変わり、参加者の好奇心を誘発するだけでなく、好奇心が旺盛であればあるほど充実感が得られるというものである。参加者が現場での知識を得て判断力を養うだけでなく、感性や自覚が育つといった波及効果も期待できる。

また、エクスカージョンでは、土木工学の専門家だけでなく、地域住民や、当該地域で仕事やボランティア活動などに携わってきた方々にもガイドやテキスト作りに活躍していただくことにより、自らの地域への愛着を醸成し、地域自らが情報発信することで大きな可能性が広がることになる。

このように、エクスカージョンは企画する側も参加する側も熱意を持って参加し、内容を磨き、その繰り返しによって多くの人が育てる企画である。

### 3. 取り組み事例「親子ふれあい見学会 木曾三川の水辺の暮らし」の概要

中部地方整備局では、さまざまなエクスカージョンに取り組んでいる。その中から、波及効果まで把握した取り組みについて紹介する。この事例は、中部地方整備局が土木学会と連携して実施したもので、その企画立案、運営に携わったものである。

「土木の日 親子ふれあい見学会：木曾三川の水辺の暮らし～悠久なる歴史での再発見～」と銘を打って、平成17年11月6日（日）親子を対象として、木曾三川下流域の低平地をめぐる治水や利水などの学習を目的としたエクスカージョンを実施した（訪問先およびコース図の概要を図 1 に示す）。

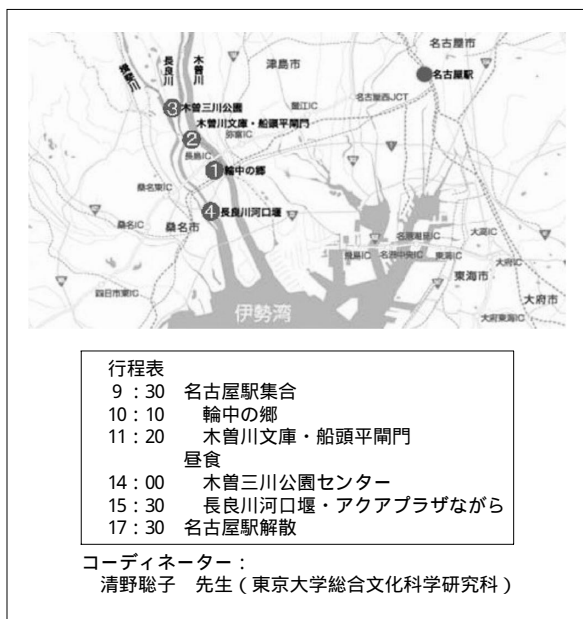


図 1 エクスカージョン行程（平成17年11月6日（日）実施）

このエクスカージョンのテーマと探訪地は、歴史的治水事業である宝暦治水から250年、長良川河口堰の完成から10年の節目にあたることに注目して、大河川下流域の生活をていねいに見て、考えることを目的とした。記憶に新しい、米国でのハリケーンカトリーナによる大水害の直後ということもあり、名古屋を中心に集まった参加者の関

心は高かったといえる。

募集人数は、解説と議論が共有できるバス1台の約40名で設定し、チラシを名古屋市内中心に図書館や公共施設に掲示して募集した。結果、当日は34名（大人16名、子供18名）が参加した。

エクスカージョンを行うにあたり、訪れる施設や内容に繋がりを持たせ、参加者にテーマの動機付けを図るためコーディネーターを置き、ガイド人と調整し、コミュニケーションを図りながら進めた。また、一方的な説明や知識の押しつけにならないように、お互いに自由な意見交換を通じて理解を深める雰囲気づくりにも努めた。

見学では、木曾三川の自然や地域の社会的な条件と身近な生活との関わりなどについて理解を深めること（例：地域の特産品）、子供たちの興味を引く実体験（例：乗船体験）を入れたことなど工夫した。



写真 1 持ち運びを考慮したテキスト

#### (1) 各訪問地における参加者とのやりとり

最初の訪問地である「輪中の郷（輪中の文化、知恵を学ぶ資料館）」では、資料館の学芸員の方から過去の大水害やそれに立ち向かう地域の歴史、住民の水防への努力等の実体験を元に思いを込めた話に耳を傾けた。現地では堤防や家屋を見学し、低平地の暮らしでは、河川からの恵みがある一方で災害の危険をはらんでおり、住民の努力の足跡やそれを克服してきたこと、公共事業をめぐる利害調整等のジレンマが昔からあったことなどを現地を歩き、地域の方からの説明を聞くことで実感を持って知ることができた。

「船頭平閘門（木曾川と長良川を行き来するため造られた明治期の土木遺産で、国の重要文化財

にも指定されている)」では、閘門の仕組みや水の流れについて説明を受けるだけでなく、実体験を通じて土木施設の仕組みを理解し、興味を持ってもらうため、子供たちが船に乗って往復する体験を行った(写真 2 参照)。



写真 2 閘門における乗船体験

明治期の施設が今もなお現役で動いている様子や、水位が目の前で少しずつ上下する様子は、参加者の印象に残ったと思われる。子供たちも普段できない体験に、見ていた親御さんたちも心配するほどのしやぎぶりであった。

「木曽三川公園センター(展望タワーが目印の公園で、治水の歴史や自然、生物を紹介する展示室や輪中特有の建物「水屋」も見学できる国立木曽三川公園の施設)」では、展望タワーの上から見える川を指さして河川名を質問したところ、子供たちが木曽三川を指さしながら答えたり、視界一面を流れる大河に驚き、「どっちからどっちへ流れているの」といった質問をしたりする子供もおり、やりとりをするうちに徐々に子供たちの関心度も高まってきたと考えられる(写真 3 参照)。



写真 3 木曽三川公園センターでの様子

最後の訪問地、「長良川河口堰(塩水の遡上を防止することにより、大規模な浚渫を可能にし、長良川の洪水を安全に流下させることと、堰の上流が淡水化されることで、水道・工業用水に利用することを目的に建設され、平成7年から運用さ

れている)」では、河口堰に収められた機械の大きさ、魚道における生態系への配慮などにも参加者は非常に大きな関心を持っていた。

さらに、現地へ移動するバスの中では、単に説明を行うだけではなく参加者の方からもお話をいただいた。平成12年の東海豪雨を経験した家族の方の体験談から、改めて自然災害が身近に起こり得るということで認識を新たにし、その上で木曽三川や長良川河口堰等を見ることにより、その役割を考える機会を持つことができたと考えられる。

また、昼食もエクスカージョンの一環ととらえ、木曽三川の恵みとして地元でとれる食材を使ったレンコンのフライ、ナマズの蒲焼きなどを供し、名産品の生産地の水、地形、土壌利用の特性やそれを支える社会基盤について解説を行った。身近な食材の背景にある話題に参加者の方は新たな興味を持っていた(写真 4 参照)。



写真 4 昼食もエクスカージョンの一環

## (2) エクスカージョンを振り返って

開催当日は、時折強い雨の降る11月上旬にしては寒い1日であったが、参加者の方には最後まで熱心に話を聞いていただき積極的な質問をいただいた。お互いの意見交換などを行ったことにより、充実したエクスカージョンになったのではないかと考えている。行程の最後にあたり皆さんお疲れのようであったが、参加者のアンケート結果からも理解度、満足度ともに高い評価を得る結果となった。また、土木技術に対する意識など、参加前よりイメージが良くなり高い意識変化をもたらした。今後の見学会への参加意欲も大人・子供ともに高くなっている。特に、河口堰の役割につ

いて、「普段マスコミが取り上げない点についても話題にしたい」との声があり、エクスカージョンの参加により、理解が深まった良い例であるといえよう。しかし、一部の説明では「(小学生の子供には)説明が難しい」との意見もいただいている。この他の意見としては、「これまでの水との闘いについて、説明者の熱意が伝わってきて理解、共感することができた」とか、「親子で社会見学に参加でき、ていねいな説明が聞ける機会は意外に少ない」「生活に関わる水や社会の状況について親子で情報共有できる機会がもっと必要」とのご意見をいただいた。

(3) 波及するエクスカージョン

このエクスカージョンの実施1年後に参加者を対象に、参加後の状況を把握する追跡アンケートを実施した。アンケートは郵送により実施し、参加した12家族のうち、9家族から回答を得た(図3参照)。

参加者のうち、約4割が本エクスカージョンでの訪問先を再び訪れている。また、「別の企画へ参加した」や「今後別の企画へ参加する予定がある」との回答もあり、参加後も引き続き社会資本に対して興味を持っていただいている。また、多くの家族が

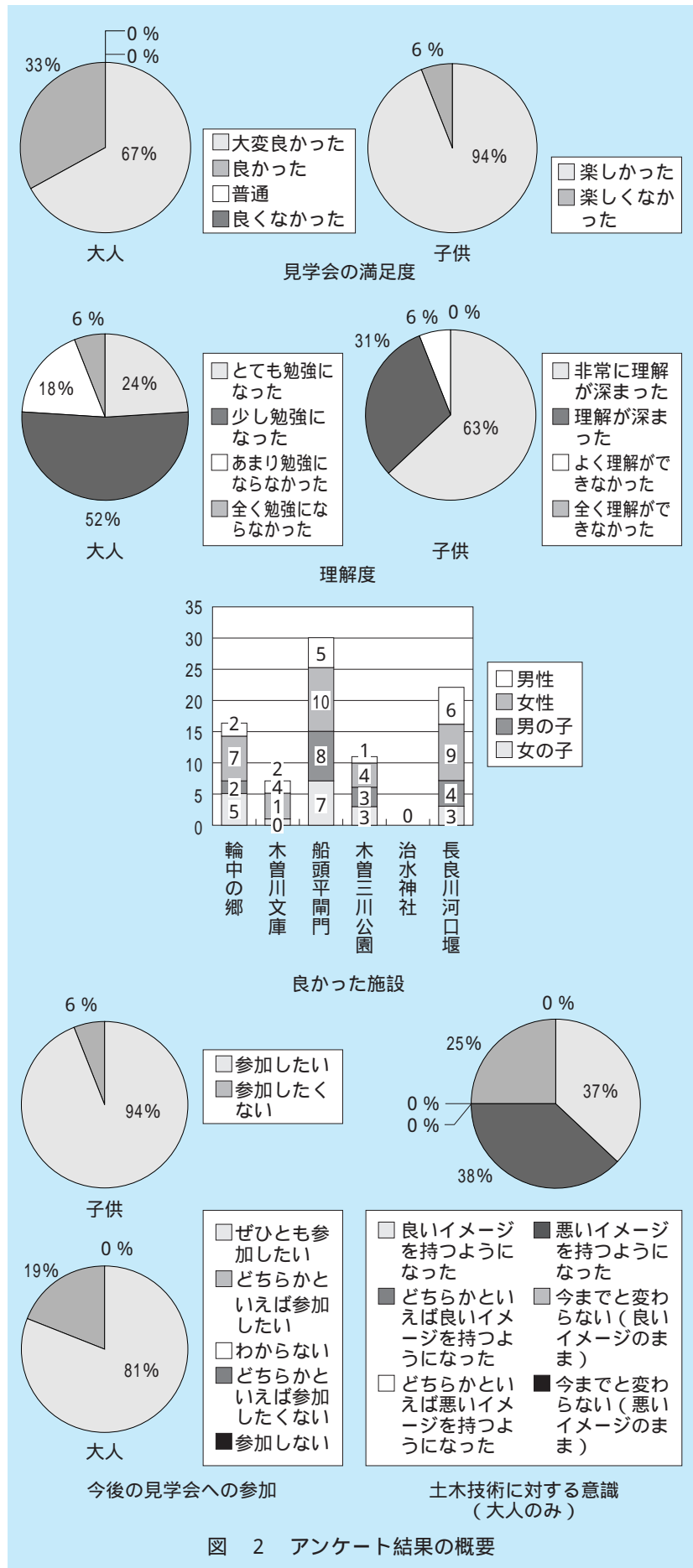
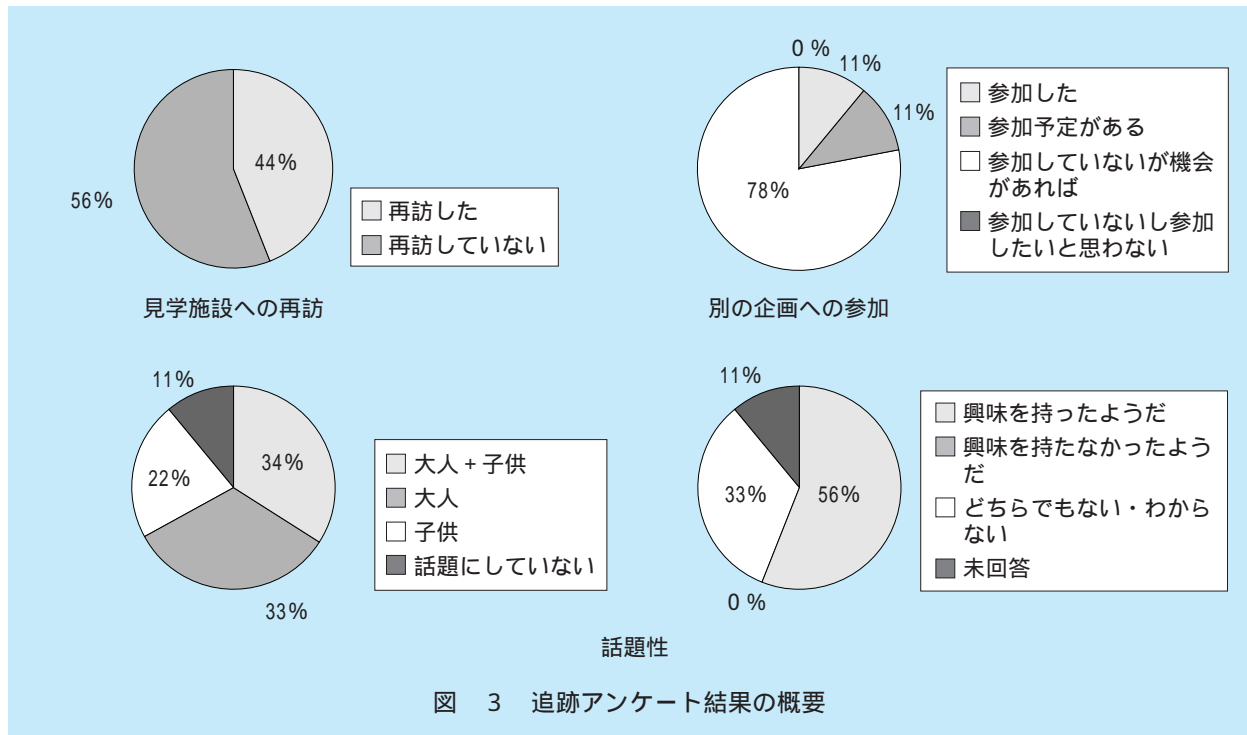


図 2 アンケート結果の概要





本エクスカージョンへの参加を周囲の方との話題にしており、そのうち約3割は話題にした相手とともに本エクスカージョンでの訪問先へ訪れており、波及効果が見られている。これらの参加者は、満足度、理解度、次回の参加意欲ともに最も良い評価をしている家族であった。

このように、エクスカージョンは訪問先の魅力を伝えるための有効な手段の一つであるといえる。また、参加者からの波及効果も、十分期待できるものであり、その効果は参加者の満足度や理解度、さらには参加意欲に比例するものと考えられる。充実したエクスカージョンを実施するには、参加者の関心を引き出すことを可能とする企画立案や説明資料の作成、ガイド人における知識の蓄積や熱意、参加者が好奇心を持ち積極的に参加すること、いずれも不可欠な要素であると考えられる。

#### 4. おわりに

現地を訪れ、それに携わる人の話を聞くことは、社会資本などの役割や必要性などを知っていただくには非常に有効である。今回の事例は、すでに整備された社会資本を見学したものであるが、現在、整備している工事現場を見学しても、同様な効果が得られると考えられる。また、実施にあたっては、単に現場を見学させるのではなく、参加や体験をさせるとか説明する側の熱意や意見交換などコミュニケーションを図る工夫をすることで、より効果的な見学会になると思われる。

これらの取り組みは、実施するものが熱意を持って、継続して実施していくことが重要であり、今後も、充実したエクスカージョン「体験型の見学会」の実施により、広い層に対して社会資本への理解がより深まることが期待されると思われる。